

Any sufficiently advanced technology is indistinguishable from magic.

—Arthur C. Clarke

Worldmaking starts from worlds already on hand: the making is a remaking.

—Nelson Goodman

新暦83年6月、ミッドチルダ。時空管理局本局中央センター。各艦船や局員との通信、管制を行う無数の輝晶モニタはひとつ残らず色を失い、空きチャンネルが不正アートの様相だ。その前に座る無数の局員もまた、蒼然として慌てふためいている。

「管制メインシステム、ダウン！」

「サブシステムに切り替えます！」

「外部からの攻撃反応、捜索中です！」

早口で方々から悲鳴にも似た報告が舞い込む中、四方を見渡す位置に座した女性だけは、一言も声を発することなく口元に両手を組む。その顔色から覗くのは、焦りというよりもむしろ怒り。

彼女の意識は常に、正面にある個人用の輝晶にあった。一瞬たりとも目を切ることなく、輝晶に浮かぶ文字列を鬼気迫る目で睨みつけている。そこに表示されていたのはひどく単純な表音文字——それもわずか一行の。

「お口に合いますれば——八神女史へ。」

ミッドチルダではまずお目にかかることのない、しかしひどく見覚えのある、わずか26種の文字体系。奥歯をぎりりと鳴らし、拳を震わせ、女性は怒りを隠さない。

「攻撃反応、見当たりません！」

思わず声を荒らげていると、個人用の輝晶に通信が入った。いらだたしげに回線を繋げると、見慣れた顔が表示される。

「はやてちゃん、ひよつとしてそっち、大変なことになってない!？」

「……よお分かったな。もう無茶苦茶や」

画面では、長い栗色の髪を右に束ねた女性が慌てている。この一大事に、という思いがぬぐい去れず、司令席に座る女性——八神はやてはほんのわずかに眉をひそめた。とはいえ大切な友人であり戦友だ。つっけんどんな反応にならないよう、努めて平静に尋ねる。

「で、何の用なん？ なのはちゃん」

「うん……これ」

そう言つて「なのは」と呼ばれた女性が見せたのは、折りたたみ式の小型機械。彼女の元いた世界では『携帯電話』と呼ばれていた個人用通信機器だ。

「ここで使えるわけにはずなのに、さつき変なメールが届いて……」

「そこまで聞いた瞬間、はやての表情が変わった。」

「……内容は？」

「えっと……全部英語で、その、何言ってるかもよく分から——」

「読み上げて」

ぴしやりと遮るような冷たい声。わずかな震えは怒りから来るものではない。ここまでの怒りに震えるはやてを見るのは、なのはにとつていや、誰にとつても初めてのことだった。なのはは何も言わずに頷き、ただただし外国語で受信文を読み上げていく。

「……さげんよう、高町女史。これより楽しいパーティの始まりだ。この一撃が魔法なるヴァージョンへのなよりの反証となるだろう」

読み終わるが先か、固く握られたはやての拳は激しい勢いで机に叩き

「ええ、そんなん探さんでも。誰の仕業か分からんけど、どこからかくらいは見当つく」

それは局員に向けた言葉なのか、あるいは自らを落ち着かせるための独り言か。女性はやおら立ち上がると、一度小さく頷いてから叫んだ。「攻撃元はおそらく……いや、ほぼ確実に第97管理外世界！ 魔力反応の有無を重点的に捜索や！」

指令が下ると同時に、サブシステムに切り替わった輝晶は慌ただしく青色の惑星を表示させていく。それを覆い隠すようにして矩形、円形さまざまな指標系が現れた。無数の数字も立ち並び、処理の途中経過をせわしく映し出していく。睨みつけ、ため息をつきながら女性は席に腰を落とした。

魔力反応の捜索状況を騒がしげに伝えるグラフの山。その後ろに悠然とたたずむ青い星。第97管理外世界。通称、『地球』。自らの生まれ故郷でもある世界からの攻撃に、女性は忤怩として顔を歪めた。

わずか数十秒で指標系は青色に染まり、処理の完了を報じる。その結果に、局員たちは一様にどよめきを見せた。

「八神司令官！ 解析結果、出ました！ 魔力反応……ありません！」

「なんやて!？」

魔力を一切使用しない次元跳躍攻撃？ そんな馬鹿なことがあるものか！

「ジャミングの可能性は!？」

「そもそも本局周辺に魔力ノイズが見当たりません！ 魔法攻撃の痕跡自体、存在しないんです！」

「そやかて、質量攻撃なわけないやろ！ せやったら物理ダメージがあるはずや！」

つけられていた。そのあまりの音に、局員は思わず手を止めて振り返る。

「……何見とんねや……早よ作業続けんか！」

普段であれば柔和としかいいようのない彼女、その口からは本来であれば絶対に出ることのないだろう言葉。激しい怒りと焦り、その両方が容易に見てとれた。

「はやてちゃん……その、落ち着いた方がいいと思うよ……」

画面の向こうから、なのはがおおるおおる声をかけてくる。はやては何も言わず、小さく首を縦に振ると、二、三度深呼吸をしてから唾を飲み込んだ。

口を開こうとして、しばし動きを止める。ここでいつもの温和な口調に戻ってしまえば、かえって不気味な印象を与えかねないのではないかはやてはなのはに向かつてだけ、申し訳なさそうにひと笑みすると、いまだ苛立っている表情を作ってから声を出した。

「ごめんな、ちよお取り乱してもうた。そやけど攻撃元は第97管理外世界で間違いない。魔法攻撃以外も視野に入れて全力で捜索や！」

張り詰めた空気の中ではやての指示が凜として響き渡る。局員はいっせいに返事をする、各員輝晶に目を戻した。

「どこの誰か知らんけど、なんの当てつけか好き勝手にしてくれよって……夜天の主、なめとんなや……」

苦々しげにつぶやきながら、首にかけられた剣十字を強く握った。さつ、と輝晶に映る青い星に目を向ける。はやての表情が変わったことを察して、なのはは凜とした笑みを浮かべてから通信を切った。

新暦83年6月。地球では6月4日が始まって数分たらず。これが、すべての始まりだった。

〈夏コミ新刊に続く……はず!〉